地方小出版情報誌
アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体139円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター
編集　アクセス編集委員会
〒162-0836　東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

建築史塾の夢 ――////☆★☆

私が出版部門を立ち上げた理由

文・建築史塾あるきすと代表　山野善郎

建築史の実測風景。建物を予めスケッチし、メジャーで細かく計測する。
写真は筆者。(2018年5月撮影)

【神社　日本建築みどころ発見シリーズ1】山野　善郎著／建築史塾あるきすと刊／A5・本体価格1250円・ISBN978-4-9908068-0-4

いつかプロの物書きになりたい、と思う若者は、いまどんな道を目指すのかな？誰もがブロガーやネット小説…ではないだろうけど。

ふとそんなことを考える。

活字離れは、「いまどきの」若者を問題視する際の常套句。特に文筆を表現の舞台に選ぶ若者の不足は近年ますます深刻である。だが、若い才能は決して枯渇していない。彼らが、ゲーム、アニメ、コピーライターなど、映像・音楽等とストーリーを自在に操る世界に向かって久しい。自己表現の選択肢と、情報を伝える媒体は飛躍的に増えた。若さは、いつだって成功を性急に求める。

建築史専門の出版部

そう考えるのは、大学教育の現場に長年身を置いて来たからかも知れない。工学部に属しながら私は、実験で再現・検証できない建築史という学問とともに四十年近く歩んだ。大学は非常勤のみになったが、いまも歴史的建造物や集落まちなみを測り、撮り、図面を描き、墨書や金石文を読む…そうした調査・研究が、私の本業である。

そんな素人が無謀にも出版界に足を踏み入れた。「建築史塾あるきすと」は、もともと自治体への報告書制作を目的に設けた、出版部門である。定価のついた本といえば僅か一冊しか刊行していないのに、この場に寄稿を求められた。どうなることやら、ここは一番、怖いもの知らずに挑戦するよりない。

出会いを企む

そこで、話は再び若者に戻る。確かに日本の若者の数は減った。だがそれは半世紀前から予測できた。乳幼児死亡率が急激に低下し、多産多死から少産少死に社会が移行する過渡期なのだから、少子高齢化は当然と言える。予測できなかったのは、情報インフレーションに、世界がこれほど急激に巻き込まれたことである。いまや、怪しげなデータの奔流から、若者が信頼するに足る一滴の情報を掬い上げることは、人生でかけがえのない恩師や友人と出会うことと同様に、得難い幸運にさえ思える。

しかも「いまどきの」大人は、当然予測できた過ちにも『想定外』『記憶にない』と逃げ回る。そして公の場で、嘘と恫喝を平然と繰り返す。そんな状況に日々曝されていでたら、まともな若者は文字情報と距離を置くに決まっている。それでも出版者は、確かで価値ある言葉と、読者の出会いを企むしかない。

読者は読めない

分かりやすい言葉、的確な図表が弊社の基本方針である。たとえば専門用語には繰返しルビを振って初心者の敷居を低くする。しかも若い読者を想定する以上、手頃な価格で届けたい。こ

れからは自社刊行物ばかりでなく、建築史に関わる良い書き手に巡り会い、幅広い読者に届けたい。現在は万能の天才建築家・アルベルティの風刺譚『モムス』(福田晴虔訳)を準備中。その後には、英語で歴史的な日本建築の魅力を発信する『Understanding Japanese Architecture』が控える。

とはいえ、伝わるように書くためには、読み手は誰か、という難問が常につきまとう。弊社唯一の既刊『神社』は、読者として期待した中高生にではなく、中高年の方々に、幸いにも好評を得た。何が誰に売れるのか、素人の私に読めるはずもない。

ワクワクを伝える

ただ一つだけは確信している。この災害列島で手間を惜しまず修理する人々の愛情と資金・技術が、燃え、朽ち、倒れる木造建築を数百年も保って来た。その姿は美しく、知れば知るほど奥深い。だから魚釣りの好きな人が川や海の写真を見るだけで釣果を思いワクワクするように、伝える工夫を重ねれば、日本建築の楽しみ方を知る人は必ず増える。国内外に、ワクワクの輪が広がる。その中から次世代の建築史の担い手、良い書き手が現れるかも知れない。

変わる原風景

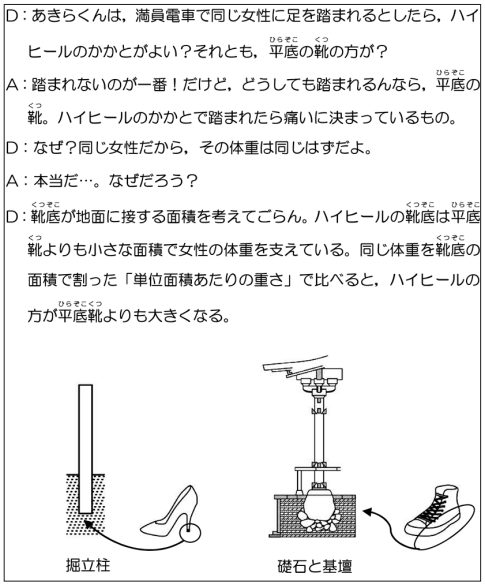
ここで、建築史という学問の現状について説明したい。自治体からの調査依頼は文化財候補の建物が多い。しかし、研究対象はもっと幅広い。

たとえば日本の原風景…さて、どんな映像が思い浮かぶだろう？石垣を築き、畦道を修理して、急峻なあるいは緩やかな傾斜地に平らな耕地を営み、目の前に広がる田畑の隅々にまで水を行き渡らせる。その合間に、茅葺木造で軒の低い家々が、水利を妨げないように点在する。

一九六〇年代、この列島に暮らした人々にとって、こうした景観を原風景と呼ぶことにためらいはなかっただろう。建築史は、そんな原風景の要素である、ふつうの民家や寺社を数多く記録して来た。

だが、いま日本人の四人に一人は東京・神奈川・埼玉に住み、地方でも人口は、高層ビルが林立する都市部に集中する。国内で産出せず、資源の枯渇は目前に迫っていても、石油化学製品は、壁紙・浴室・カーポート、さらに衣服・食品トレー・ペットボトルに至るまで、身の回りに溢れている。

これが一九九〇年代以降に生まれた人々にとっての原風景である。彼らにとって、低層の木造家屋が点在する農山村は、原風景どころか、新鮮な感動の対象であることも多い。建築史はいま、普通の日本人の原点を示すというより参照に値する異文化の記録として貴重になった。



【神社　日本建築みどころ発見シリーズ1】の抜粋

建物でたどる記憶

こうした劇的な変化を、写真や地図、文献でたどることは、もちろん重要である。だが、現存する建物は、それ自身、膨大で、明快なデータの塊といえる。どんな素材を、いかに用いて建てたか、どこが傷み、時代に合わなくなって、いつ、どのように補修したか。地道に詳しく調べて記述すると、その建物の履歴だけでなく、変化を要請した各時代の動きまで推察できる。

たとえば、古民家を早い時期に再生した住宅を調査すると、屋根葺き材が茅から瓦に、土間と竈が、フローリングとシステム・キッチンに、畳に掘り炬燵の生活が、椅子とダイニング・テーブルに変化した過程が分かる。屋外の便所や浴室が、いつ頃から屋内に取り込まれたかも分かる。そして、どれほど生活が欧米化しても、土足のまま床に上がる習慣が、今なお発生していないことも。

建物が提供する、こうした時代変化の記憶は、幅広い読者にとって有益と考える。なぜなら、玄関で靴を脱ぐ伝統をいまなお根強く守っているのは、一握りの建築史研究者ではなく、この列島に生まれ育ったほぼ全ての人々なのだから。

自らの何気ない習慣が、いかに深く建築と関わるかを知れば、先人が私たちに遺してくれた財産をより豊かに受け取ることができる。また、築年数で一律に不動産価値を計るのではなく、誰もが優れた建築を見分ける道が開ける。継ぐ人のない実家の処分に頭を悩ますよりも、その価値を活かす方法も見いだせるかも知れない。

伝えるに足る

建築史の効用をこんな風にいくら並べても、きっと世間知らずの夢物語と笑われるだろう。しかし笑われることには慣れている。何しろ教員である。学問との出会い、教員や学友との出会いで人は変わる…そう夢見て裏切られ、それでも頑なに信じるからこそ、教育は成り立つ。

この春の新入生が大学を卒業するのは、戦後七十七年目。明治維新から敗戦までが七十七年間だから、もうすぐ戦後が戦前よりも長くなる。戦前の書物には『後世に伝ふべき…』という言葉がしばしば現れる。

私には伝ふべき、というほど自信はなく、むしろ伝えるに足る建物やまちなみをどう残せるだろう、どうすれば次世代は喜んで受け取ってくれるだろうと、悩み多き日々を送っている。

「専門家だけでなくより広い読者に伝えたい」と始めた出版で試行錯誤しつつ、歴史を重ねた建物たちと読者との良い出会いを、できるだけ長く企み続けたいと思う。

＊

（やまのよしろう／建築史塾あるきすと代表）

新刊ダイジェスト

※価格は税込（消費税率8%）表示です。

『コスタリカの奇跡』●シネ・フロント社編

中米南部、人口400万余の小国コスタリカが軍隊を廃止して70年になる。各国の軍事的思惑が交錯する世界有数の危険地帯でありながら、軍隊を持たない国を維持してきたのは、まさに奇跡だ。その外交力と非暴力による紛争解決の歴史を追ったドキュメンタリー映画が制作され、日本国内でも自主上映会が各地で開催されている。本書は完全採録シナリオ、監督マシュー・エディーへのインタビュー、各界からの推薦・メッセージ、落合恵子のエッセイ「平和という、確かな文化」、アーサー・ビナードと小森陽一の対談「憲法をすてた国コスタリカと憲法9条をもつ日本」、同国の社会制度（民族、選挙、教育、社会保障、環境等）と予算、経済、政治を知る基礎データ、観客の映画感想文などを収録した小冊子である。エディー監督は映画制作動機を、非武装化が政治的衝突や戦争、紛争解決に対する思考や言動に与えている影響を知りたかったと述べている。本書を手に、まずは映画を。

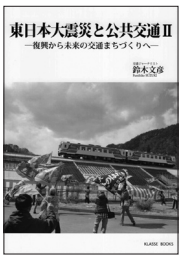
◆864円・B5判・82頁・**シネ・フロント社**・東京・2018/5刊・ISBN9784503214768

『中世の名門　宇都宮氏』●下野新聞社編集局編著

『下野国が生んだ足利氏』が昨年末に同社から刊行されたが、本書はその第2弾というべきもの。そもそも下野国「宇都宮」は、宇都宮社（二荒山神社）の社務職に補任された八田朝綱が名字「宇都宮氏」を名乗り、その領地を地名にしたのが始まり。出自は不明な点も多いが、朝綱の父・宗綱が常陸国八田を拠点とする京武者。朝綱も軍事貴族として、対奥州の軍事都市および交通の要衝である宇都宮に進出、鎌倉幕府の有力御家人として源頼朝も一目置く存在となった。孫の頼綱（蓮生）は「小倉百人一首」誕生のきっかけをつくった教養人でもある。本書は、下野新聞に去年9月から今年3月まで連載されたものが基になっている。2011年の「宇都宮氏に関するシンポジウム」（栃木県庁）と2017年の栃木県立博物館「中世宇都宮氏」展を踏まえた内容のため、最新の研究成果を盛り込んでいるのが大きな特徴だ。『足利氏』同様、簡潔で平易な文章でありながら質の高い内容である。

◆1,620円・四六判・215頁・**下野新聞社**・栃木・2018/6刊・ISBN9784882867043

『東日本大震災と公共交通Ⅱ　－復興から未来の交通まちづくりへ』●鈴木文彦著



東日本大震災被災地の公共交通についてのレポート。1巻に続いて本書では復興が徐々に進んでいく時期について取り扱っています。津波や原発事故で鉄道復旧がなかなか進まない区間の代替や、変化した生活圏を結ぶことにもバスの機動性が生きました。日本全国から車両の援助なども受けバス業界の頼もしさも感じます。一方鉄道の復旧には様々な問題が立ちふさがります。沿岸を走るJR山田線は三陸鉄道に移管、気仙沼線と大船渡線はBRT(専用道を走るバス)での復旧となりました。しかしもともと利用者の少ない区間だけに、著者の見通しも必ずしも明るいものではありません。バス会社も運転手の不足や利用者の減少で苦しい経営となっています。それでも「『ライフライン』としての公共交通」と著者が述べるように、いざというとき私たちの移動の大きな支えになってくれるのが公共交通です。それを普段からどう活かし育てていくかという課題を考えるうえでも示唆に富む一冊です。

◆4,320円・A5判・327頁・**クラッセ**・東京・2018/4刊・ISBN9784902841220

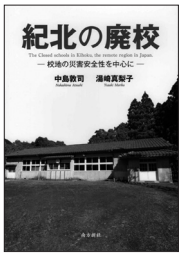
『未来は自然の中にある。』●福嶋　誠著

群馬と長野の県境、浅間山の北山麓、標高１１００メートルの北軽井沢の辺鄙な地に「きたもっく」という小さな会社がある。本書は過去２５年間売上げを伸ばし続けるこの会社の企業理念を説き、可能性について語る。その理念とは、スローライフ、ロハス、オーガニックスタイル、自然との共生といった甘いものではなく、フィンランド語の「ルオム」、すなわち「自然に従う生き方」という考えに支えられる。

具体的には、この火山灰土の荒野に千数百本の木を植え続けてキャンプ場という場を作り、フィールドビジネスを試みた。そこからは樹木と人との親密な関係、人と自然の相互作用、炎のある暮らし等、多方面な価値の創造を生み、人と自然の関係のわかりやすい可視化が可能となった。風土が人をつくり、自然が人を変える。未来はテクノロジーの中にあるのではなく、未来は自然の中にあるというルオムを理念とする会社、ルオムに基づいて稼ぐ事業を求め、そこに誇りある自発性を持った労働（仕事）を生む。

◆1,944円・A5判・155頁・**上毛新聞社**・群馬・2018/5刊・ISBN9784863522237

『紀北の廃校　ー校地の災害安全性を中心に』●中島敦司著



文部科学省の調査によると、平成14年からの14年間で6811校もの公立学校が廃校になったという。近年は分校が姿を消し、小中一環教育の義務教育学校が増えているなど、学校の姿自体が大きく様変わりしてきている。

本書では、和歌山県北部の廃校をベースとして、校地の災害安全性を中心に、歴史や地域風土と学校との係わりなどがまとめられている。対象地域においては、8割近くの廃校が危険地域を避けて安全な場所に設置されていた。過去の土砂災害や洪水災害の様子を見ると、生活の積み重ねが安全地の選定につながっていることがわかってくる。防災を考えるにおいては、「災害は押さえ込もうとするのではなく、距離感を大切にして共存につなげること」が大切なのであろう。

著者は研究を進めるにあたり、年間に50日和歌山県内のフィールドに出たという。234校に及ぶ廃校写真を見ると、著者が筋金入りの廃校マニアでもあることが想像できる。

◆2,700円・A5判・237頁・**南方新社**・鹿児島・2018/3刊・ISBN9784861243806

『猫はしっぽでしゃべる』●田尻久子著

読んでいる新聞の上に乗り、構ってくれと全身で訴える。四匹の猫と暮らしていると猫はしっぽでしゃべるのがわかる。考えを言葉に置き換えるのはとても難しい。人間にもしっぽがあれば意思の疎通が楽かもしれない。そう思う著者は熊本で17年前から喫茶店オレンジを、そして10年前からはその隣で橙書店という小さな本屋を営んでいる。店主ひとりの選書で成り立ち、偏っているかもしれないが、そこが長所でもあり、読む本、出会う人、経験が書棚を成長させてくれている。さらに2016年には地元の評論家・渡辺京二の発案で『アルテリ』という文芸誌を創刊したが、創刊直後に熊本地震が起こり、日常は変化を余儀なくされたが、本と珈琲で人と人とをつなげてきた姿勢は変わらず、安らぎの空間を提供し続けている。エッセイの中でも多くの本が紹介され、書棚を覗いた気分になれる。詩人・伊藤比呂美ら4人の寄稿文小冊子付。いかに橙書店が愛されているのかが存分に伝わってくる。

◆1,512円・四六判・187頁・**ナナロク社**・東京・2018/5刊・ISBN9784904292808

地方小出版流通センター　ジャンル別新刊案内

2018年6月1日～30日
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。

価格は税込（消費税率8%）表示です。

【雑誌】

◆**faura**　60　大橋　弘一編　A4　80頁　1028円　ナチュラリー　［北海道］　978-4-503-21485-0　18/06

◆**あおもり草子**　No.251　佐藤　史隆編　A4　48頁　600円　企画集団ぷりずむ　［青森］　978-4-503-21487-4　18/06

◆**SPRIDE**　vol.24　2018年8月号　渡辺　直明編　A4　95頁　730円　下野新聞社　［栃木］　978-4-88286-696-1　18/07

◆**GREEN REPORT**　462　2018年6月号　廣瀬　仁編　A4　192頁　2800円　地域環境ネット　［埼玉］　978-4-905457-94-7　18/06

◆**子どもと読書**　430号　2018年7・8月号　親子読書地域文庫全国連絡会編　A5　40頁　550円　親子読書地域文庫全国連絡会　［神奈川］　978-4-907376-30-7　18/06

◆**調査情報**　No.543　2018年7－8月号　岩城　浩幸編　255mm × 160mm　100頁　789円　TBSテレビ　［東京］　978-4-906908-72-1　18/07

◆**AXIS**　Vol.194　2018年8月号　石橋　勝利編　A4　128頁　1800円　アクシス　［東京］　978-4-503-21495-9　18/08

◆**宗教民俗研究**　第28号　日本宗教民俗学会編　A5　132頁　2160円　岩田書院　［東京］　978-4-503-21482-9　18/03

◆**史聚**　51　史聚会編　A5　102頁　1080円　岩田書院　［東京］　978-4-503-21483-6　18/04

◆**洋学史学会研究年報**　洋学25（2018）「洋学」編集委員会編　A5　224頁　4320円　岩田書院　［東京］　978-4-946540-25-7　18/05

◆**地方史研究**　第393号　地方史研究協議会編　A5　104頁　1234円　岩田書院　［東京］　978-4-87294-993-3　18/06

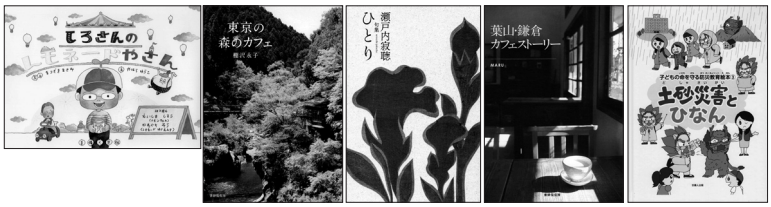
◆**明日を拓く**　No.199　吉田　勉編　A5　101頁　1080円　解放書店　［東京］　978-4-503-21479-9　18/06

◆**仏事**　No.213　2018年6月号　奥村　昇編　A4　96頁　1620円　鎌倉新書　［東京］　978-4-503-21477-5　18/06

売行良好書　期間：2018年6月15日～7月14日

［出荷センター扱い］※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『しろさんのレモネードやさん』1512円･吉備人出版　(2)『東京の森のカフェ』1404円・書肆侃侃房　(3)『ひとり　句集』2160円・深夜叢書社　(4)『葉山・鎌倉カフェストーリー』1404円･書肆侃侃房　(5)『土砂災害とひなん』1296円･吉備人出版　(6)『猫はしっぽでしゃべる』1512円･ナナロク社　(7)『こないだ』2160円・編集工房ノア　(8)『ハトと日本人』1836円・弦書房　(9)『松浦武四郎入門』1080円・月兎舎　(10)『無脊椎水族館』1944円・本の雑誌社　(11)『日本ワイン誕生考』3132円･山梨日日新聞社　(12)『かくれキリシタンの起源』4320円・弦書房　(13)『琵琶湖はいつできた』1620円・サンライズ出版



［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『昭和プロレスマガジン　４６』1000円・昭和プロレス研究室　(2)『本の雑誌　４２２号』840円・本の雑誌社　(3)『お二階へご案内～』1080円・東京かわら版　(4)『東京かわら版　７月号』500円・東京かわら版　(5)『こないだ』2160円・編集工房ノア　(6)『無脊椎水族館』1944円・本の雑誌社　(7)『北朝鮮のミサイルはなぜ日本に落ちないのか』1836円・白馬社　(8)『第１４回 京都検定 問題と解説』1512円・京都新聞社　(9)『ＤＣプランナー２級合格対策テキスト　２０１８年度版』2700円・経営企画出版　(10)『中世の名門宇都宮氏』1620円・下野新聞社

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『南山城から視た異国京都』1620円･澪標　(2)『日めくり子規･漱石』1080円･愛媛新聞社　(3)『松浦武四郎入門』1080円・月兎舎　(4)『東京の森のカフェ』1404円・書肆侃侃房　(5)『もはやこれまで』1620円・星湖舎　(6)『人生と道草　第２号』1080円・旅と思索社　(7)『山陰の戦国史跡を歩く　鳥取編』1728円・ハーベスト出版　(8)『トコヤロード』1512円・風人社　(9)『おきなわ　辺野古』1080円･榕樹書林　(10)『柳　宗悦』2592円･弦書房　(11)『葬られた驚愕の古代史』3024円・創風社出版　(12)『埼玉の城』2700円・まつやま書房　(13)『探訪栃木山』2700円・随想舎

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

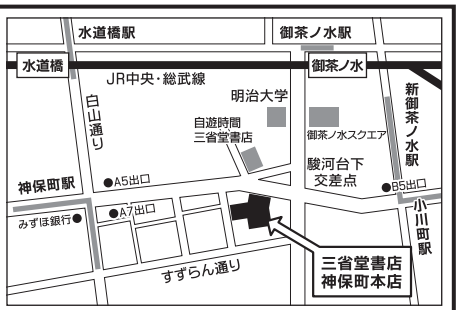
▼「北海道」の名付け親と呼ばれる松浦武四郎にとって今年は生誕200年および北海道命名150年という記念すべき年で、各地で様々な催しが行われているようです。

北海道博物館特別展示室では、８／26まで【第４回特別展「幕末維新を生きた旅の巨人 松浦武四郎―見る、集める、伝える―】が開催中です。武四郎の生まれ故郷、三重県の月兎舎から刊行中の**【松浦武四郎入門】**（本体価格1000円 ISBN978-4-907208-12-7）が現地ではたいへん好評で勢いよく売れているとか。以下北海道博物館ＨＰより転載いたします。「〈北海道の名付け親〉と呼ばれる松浦武四郎（1818-1888）。伊勢国（現三重県松阪市）で生まれ、幕末期にロシアとの国境問題で揺れた北海道を６回踏査し、アイヌ民族の生活状況などを克明に記録したことはよく知られています。彼はまた、幕末の志士や政治家、学者、文人との幅広い交流の中で〈情報通〉や〈蒐集家〉としても有名だったことなど、これまであまり知られていない顔も持っています。 強い好奇心と情熱のもと、旅に生き、幕末維新という激動の時代の諸相を集めて、伝えようとした、その希代の生涯をたどります。」

郵便販売のご注文方法

◎お名前、お届け先（郵便番号、住所）、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までＦＡＸでご連絡ください。
◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせて頂きます。
★地方・小出版流通センター
ＦＡＸ：０３－３２３５－６１８２

三省堂書店　営業のごあんない
BOOKS SANSEIDO
神保町本店 ４階
地方出版・小出版物フロア
営業時間　10：00 AM ～ 8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp
本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。



地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。